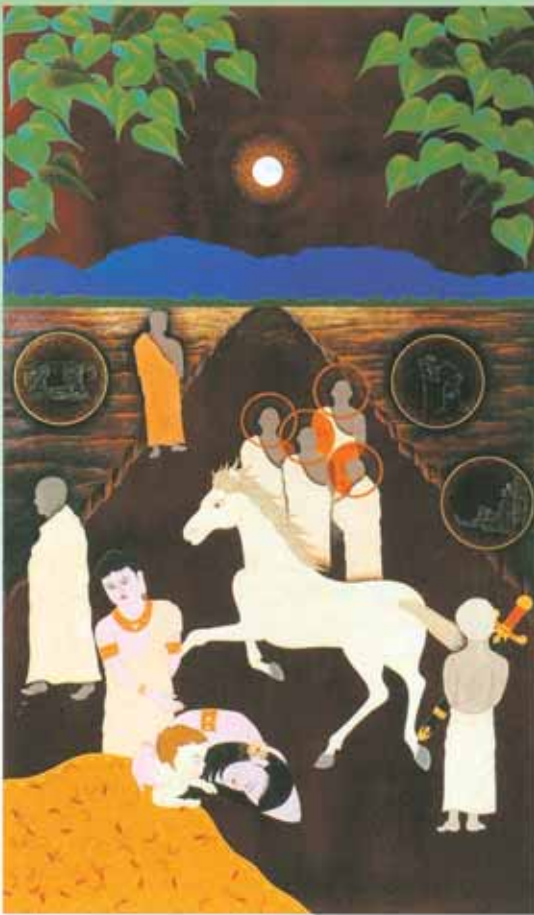




釈尊伝時絵のお話 その2

前回の誕生少年時代に続く場面は、王子の苦悩と出家がテーマになっています。前号で申し上げた通り、お釈迦



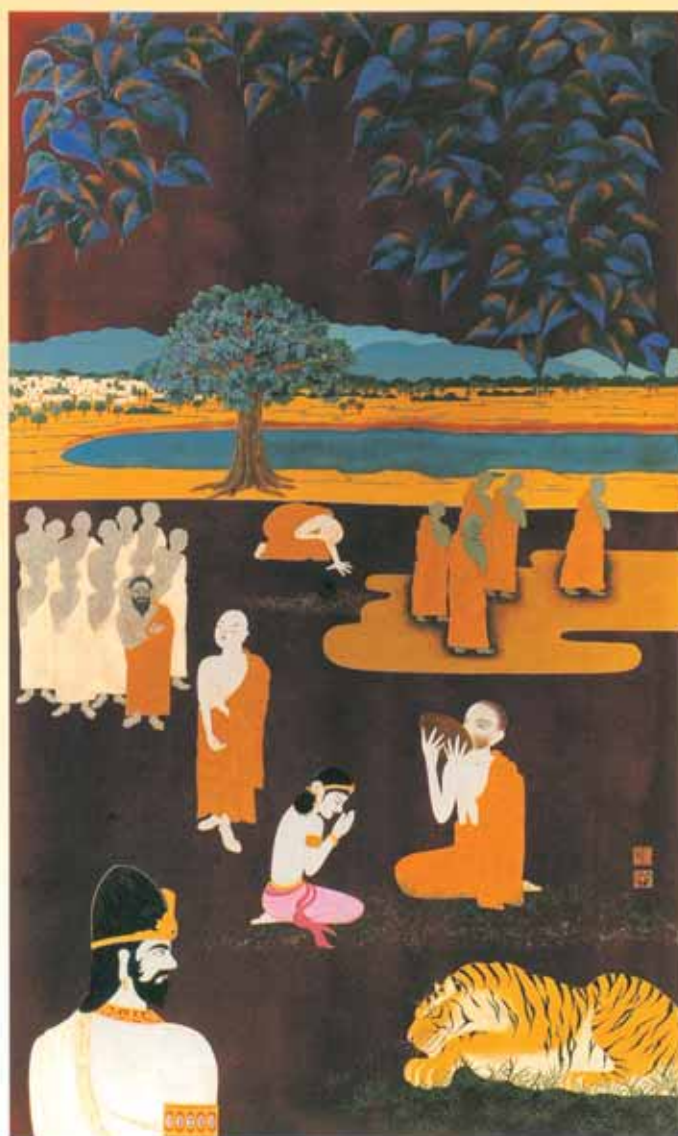
様は幼年時代に父スッドダーナ王の後を継ぐならばインド大陸全土を征服する大王となり、出家し修行の道を歩むならば、この上無い悟りを開き仏陀となるであろうと、アシタ仙人という方から予言を受けます。これを聞いて喜んだ父王でしたが、シッタルタ王子の少年時代のお釈迦様は王の期待を裏切るものでありました。何しろお釈迦様は大人しく静かな少年だったので。何より若く血気盛んである筈の年頃なのに暗く沈んだ表情を見せる事が少なくありません。父王は王子が王位を継ぐよりは出家の道を歩むのではという不安に駆られます。そこでスッドダー

ナ王は、王子が無常を感じるような事柄は出来るだけ避けるように家来に命じ、季節に応じた三つの宮殿を与え、結婚をさせたと上に沢山の女性を侍らせました。しかし、そのような物質的な喜びでは王子の心を充た

すことは出来なかったのです。

時絵ではお釈迦様の直接の出家の要因となったと経典では説かれる四門出遊の内、「病人」「老人」「葬列」が円の中に平研ぎ出し時絵で表現され、お釈迦様が憧れたという出家者だけが超然と独り描かれています。中央の白い馬はゴータマシッタルタ王子の愛馬カントカです。お釈迦様と同じ年月日に生まれた馬とのことです。この時二十九歳！なんとという老馬！馬の尻尾を掴んでいるのはチャンナという方で、ゴータマ王子の信頼する家来でありました。馬に乗り城を出た王子ですが、蹄の音を立てまいと神々が馬の脚を支えて宙を飛んだと記す経典もあります。後光のある四人は馬の脚を支えた神々を表現したものです。

時絵の下方に眠る女性と子供はお釈迦様の妻ヤシヨダラ妃と子息のラーフラです。城を出る前に王子は妻と息子の寝顔を見る為に二人の寝室を訪れます。ここで王子の心に父親としての慈愛が生まれたのでしよう。ラーフラに触れたくなりました。しかし、ヤシヨダラ妃の腕が邪魔でラーフラに触れるのを止めてしまったのだと言います。



次の場面は修行時代のお釈迦様です。もう王子では無く出家の姿となっています。まだ、悟りを開く前ですので、ここではお釈迦様や王子とは呼ばず、菩薩と呼ぶ事にします。

さて、菩薩は出家をすると王舎城へと足を延します。釈迦族の都カピラウアストゥから遙かに南の国です。蒔絵の中央に蹲っている方がいますが、これは初めて托鉢をされた際の菩薩の姿です。菩薩は鉢をもって家々を巡り、食物を鉢に供えて頂きました。しかし、食す

段になると、そこは王家で育ったひ弱さもあり、余りにも王家のそれとは違う食べ物喉を通らず、嘔吐しそうになったと経典は伝えていきます。経典はときにお釈迦様の人間的な部分を私達に伝えてくれています。それらの中には、上記のような若き日の苦労や頭痛持ちだったとか本来なら隠しても良い事まで記述されていることは特筆すべきことではないかと私は思います。このお話は本生経からのお話ですが、誰の人生にでも挫折を体験するということを伝え

る為に、あえて描いて頂きました。

出家した当初、お釈迦様は伝統的な瞑想法を修めた行者のもとで修行しています。アーラーラ・カーラーマとウッタカ・ラーマブッタという名前の行者で、最終的にお釈迦様が坐禅で悟りに到達したところには、このお二人の影響が大きいという説もあるようです。アーラーラ・カーラーマは無所有処定という瞑想を体得した人でした。アーラーラが長年かかって体得した境涯に、菩薩が容易く到達したのを目の当たりにし、菩薩を片腕と頼りにしますが、菩薩はこの境地に安住せず、アーラーラ仙人のもとをさります。菩薩は、さらにウッタカ・ラーマブッタに非想非非想処定を学び、これにも飽き足らず苦行の道へと入るのです。絵の左側に描かれた、多くの弟子を引き連れている髭の行者がこれに当たります。ここではお二人の仙人の内お一人だけが代表で描かれています。下方でお釈迦様を見つめているのは王舎城の主ピンピサーラ王です。王は修行を始めたばかりの菩薩を眼にし、その神々しさに臣下となることを求めます。しかし、菩薩が自分も王族の出身で王位を捨てて出家した事を告げる

と、王は修行を完成した折には必ず外護者となるという約束し菩薩と別れます。後にピンピサーラ王はこの約束を守り、仏教教団最初の寺である竹林精舎を寄進したのでした。

下方に描かれた虎は特に修行の仏伝とは直接関係のあるものではありませんが、下絵を描いた鶏足和尚が修行時代の菩薩の未だ不安なる心地を表現する為に描いたとのこと。

さて、この絵のもっとも重要なシーンは村娘スジャータが菩薩に乳粥を供養しているところです。經典によって表現は様々ですが、スジャータは村の長の娘で既婚者とも言われます。既婚者説では、スジャータは子宝に恵まれる事を念じてあるご神木に供物を供えていたのですが、この念願が成就し、その御礼に最上の乳粥を作って神木に供えに行ったところ、苦行でやせ衰えた菩薩に出会い、その姿を樹木の神であると思つて乳粥を供養したのだと言います。

乳粥を食す菩薩の上方に描かれる五人の修行者は菩薩の修行仲間です。この五人の修行者は菩薩の身を案じた父王が派遣したものだとも、ウッタカ・ラーマプッタの下で出会った仲間とも言わ

れる人たちです。菩薩が女性から供養を受ける姿を見て、菩薩が墮落したのだと思ひ、これに失望して菩薩のもとを去ったのです。後にこの五人の修行者は鹿野苑という場所で、お釈迦様の初めての説法を聞く事になります。

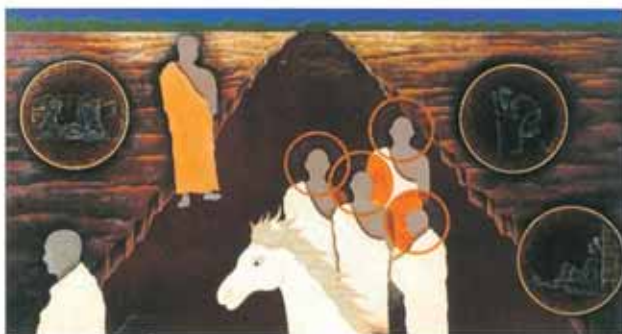
以上、今回も小衲の思い付くままに壁画に描かれるお釈迦様の生涯を書き出してみました。お釈迦様のお生まれになる直前から初めて説法をされるまでの生涯は、いくつかの經典がテーマとしてこれを扱っています。やはり仏教は解脱を目指す宗教ですから、お釈迦さまが如何に覚ったかというは、修行者にとつて最大の関心事で、いろいろな方が伝聞される逸話を基に經典を書いたのだと思います。ここに取り上げたお釈迦様の逸話はまさに小衲の思い入れで選択したものであり出典も様々です。特に少年時代のお釈迦さまについては心身ともに神々を凌駕するほどの能力があったと伝えている場合も多いのですが、大人しい方だったという經典も少ないながら存在し、この場合は客観的事実としては教祖のネガティブな部分を伝えている方が史実に近いのではという憶測の下に、今回の説明も記しています。

どうか寛容なる心をもってお読み頂ければ幸いです。

お釈迦様生涯図に使われている 蒔絵技法及びその材料について

前回に続き、蒔絵師の渡辺栄一先生に当山の壁画に使われている蒔絵の技法を解説して頂きました。前号とも併せてご覧ください。

*平研ぎ出し蒔絵(ひらとぎだしまきえ)
四門出遊図の円窓(病、老い、死)画面等に使用、金銀粉を蒔いて絵を描き、画面全体に透き漆や黒漆を塗り込みのち研ぎ炭で平らに研ぎ出し表現する技法で蒔絵と塗面が同化した画面を作ります。金銀粉でのぼかしや柔らかい表現ができ上品で穏やかな画面構成が出来ます。





*螺鈿細工（らでんざいく）

螺鈿細工とはあわび貝、夜光貝（やこうがい）、白蝶貝（しろちようがい）等の厚く加工した貝を、糸鋸などで文様を切り出し、文様の形に掘り込んだ漆器面にむぎ漆（小麦粉と漆を混ぜたもので強い接着力がある）で貼り埋め込む技法で、貝を漆器面より高く盛り上げ立体的に表現する場合と、より深く埋め込んで平らに研ぎ出す場合があります。壁画ではお釈迦様や、他の人物、動物の目などに使用しています。また、四門出遊図の月にも、白漆で「伏せ彩色」したやや厚い白蝶貝を使用しています。今回は成道の場面を紹介致します。

東園寺行事報告

◎先住十七回忌を厳修して

去る7月8日、当山先住精道和尚十七回忌法要が瑞巖寺起雲軒老大師に焼香師をお願いし、法縁深い寺院方のご随喜、さらには檀家役員方のご来臨を賜り、厳粛な中にも和やかに先住を偲ぶ法要を営まれました。ご来臨頂いたご尊宿方、檀家信徒役員、法縁者の方々には、お忙しいところをご焼香賜り心より御礼申し上げます。

さて、先住精道和尚は昭和四十二年より平成六年にわたり、二十七年間住職を務めました。今思えば二十七年という時はあまりにも短いものでありましたが、その体躯の如き太く短い濃厚な時間を過ごし、常人ならば一生を費やして行うような事業をいくつもやり遂げました。若干例をあげるならば、先々住職からの念願であった幼稚園を設置したのは先々住職遷化の年、その翌年には早くも第一期生を入園させています。また、宗門行政にも早くから参画し、宗会議員を経て、四十代後半の若さで花園会本部長の要職に就き宗



門の中枢に入りました。寺域の整備に關しては、現在の境内地に建つ殆どの建築物が精道和尚に手に依るものです。鐘楼、三重塔、不動堂、大庫裡等様々な事業を成し遂げ辣腕を揮った先住職ですが、その原動力となったものは言うまでもなく、仏法興隆という大きな願心でありました。先住和尚十七回忌という大きな節目を越えて、改めて先住和尚の力量を慮ると、ただ我が身を愧ずるばかりであります。檀信徒各位が安心してご先祖のお参りが出来る

ように、さらには仏法を行じたいという方に門戸を開けるような寺院を目指し精進努力する所存でございます。何卒今後ともご法愛賜りますようお願い申し上げます。

平成二十二年十月一日

東園寺 小住 成也合掌

◎花祭りの夕べ

四月十一日講師に平林寺副住職、妙心寺派東京禅センター顧問である松竹寛山老師を講師としてお迎えし、第三十一回仏教文化講演会花祭りの夕べが開催されました。また翌日には当山近隣の若手僧侶向けにこれからの坐禅会を考えるとというテーマで松竹老師を講師に禅ワークショップの体験講座が行われました。



◎大回向

五月一日、恒例の大回向法要が厳修されました。

◎青山居士毎歳忌

6月19日午後5時より、塩釜港開港恩人四代藩主伊達綱村公の毎歳宿忌が厳修されました。



◎墓地整備計画(モノレール設置事業)の進捗について

お待たせしております。境内墓地モノレール設置計画ですが、前号でお知らせした通り幼稚園の耐震診断の結果を考慮して計画を練り直しています。尚、この夏に行った幼稚園園舎の耐震調査によれば、コンクリートや構造計

算の結果は概ね良好で、玄関部分に耐震壁を増設すれば良いという程度の補修で済むとのことでした。檀信徒各位におかれましては詳細な計画の発表までもう少しお待ちください。

◎青壮年部総会

青松会総会が開催され、会長黒澤鏡次氏の任期満了を受けて津田武彦氏が新会長に選出されました。新会長の下で様々な行事が推進されるものと期待されます。

◎地蔵流し法要

九月十四日、塩釜連合寺院主催の地蔵流し法要が厳修され、檀信徒有志が参加致しました。



幼稚園だより

塩釜中央幼稚園 ☆ 塩釜第二中央幼稚園



お遊戯会 (第二)



キッズクラブ (中央)



プール遊び (中央)



プール遊び (第二)



茶道 (第二)



サッカー教室 (中央)



運動会 (第二)



稻荷不動堂大祭 (中央)



書道教室 (中央)



七夕 (第二)



給食 (第二)



避難訓練 (中央)



花祭り子供大会 (中央)



節分 (第二)

寺庫紹介

雲居希膺禪師

「柴門獨掩千聖不如」

瑞巖中興開山雲居禪師の希膺書。

「柴門（さいもん） 独り掩（おお）うて千聖も知らず」

ひっそりと粗末な門を閉じて、どんな聖者もその境涯を知ることには出来ないという意味。牧童と牛の関わりを通じて、悟りの心境が深まるプロセスを十の段階に亘り説いた廓庵和尚十牛図の最終章に載せられる言葉。十段階の修行のプロセスの最終章でありますから、修行の完成、修行者の理想をうたったものです。

全文を紹介すると「柴門（さいもん）独り掩（おお）うて千聖も知らず、自己の風光を埋めて、前賢の途轍（とてつ）に負（そむ）く。瓢（ひさご）を提（さ）げて市に入り、杖を策（つ）いて家に還る。酒肆魚行（しゅしぎよこう）化して成仏せしむ。」

これは、簡素な生活をし、聖者達も及ばぬ境涯を持ちながら、自らの

輝きを隠し、先達の祖師方の後を追うことも無く、徳利をぶらさげて町に行き、杖をついて家に帰れば、酒屋や魚屋を導いて成仏させてしまうという意味。つまり修行の成果を見せつける事無く、町の人々と自然に接し、それでいて市中の人々を安楽させることを修行者の理想として説いているのであります。今どきの禅僧は市井に入ると、逆に俗に飲み込まれてしまいますが…。

大名や上級武士から一般庶民まで、階級の隔てなく人々と接した雲居禪師にびつたりという言葉であります。



行事予定

● **塩釜中央幼稚園体験保育と給食試食会** ~幼稚園ってどんなところ？給食はおいしいのかな？

【日時】平成22年10月19日（火）午前10時15分 体験保育 10時45分 給食試食会

●満3～5歳のお子様と保護者の方が対象です。詳しくは塩釜中央幼稚園まで TEL 022-362-8651

● **塩釜第二中央幼稚園 大運動会**

【日時】平成22年10月9日（土）午前9時 【ところ】多賀城東小学校

来年度入園希望者や卒園児の観覧もごさいます。

● **東園寺所蔵墨蹟展**

【日時】平成22年12月17日（金）～18日（土）まで

江戸期の墨蹟を中心に百本近くの掛軸をご覧頂けます。

● **成道会の夕べ**

【日時】平成22年12月18日（土）午後5時

講演会 伊達政宗公の手紙（仮題） 講師 東海林 恒英先生
～石川康長宛消息を中心に～

会費 2,000円 引き続き忘年会参加希望の方は寺務所まで

宗教法人 東園寺 〒985-0026 塩釜市旭町4-1

022(362)0777 寺務所

学校法人 東園寺学園 〒985-0012 塩釜市芦畔町13-51

022(362)8651 中央幼稚園

代表役員 千坂成也 理事長 千坂秀也 花園会・会長 阿部久壽

022(365)5616 第二中央幼稚園

022(364)4444 FAX

東園寺ホームページ <http://www.toenji.com>

坐禅会法話会の情報はYahooブログ「布袋の袋」

